

平成 21 年 5 月 15 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18500598

研究課題名（和文） 幼老統合ケアにおける世代間交流プログラムの開発

研究課題名（英文） Development of Intergenerational Shared-Site Programs

研究代表者

吉津 晶子（YOSHIZU MASAKO）

熊本学園大学・社会福祉学部・准教授

研究者番号：60350568

研究成果の概要：

「世代間交流」の必要性が高いと理解されてはいるが、実際に行なおうとする場合に、「環境調整」「物的資源」そして「人的資源」の確保において困難を抱えているということが分かってきた。このような現状の中、世代間交流を支えていく人材育成のための教育と現場トレーニングのプログラム作りが課題である。今回の研究結果より明らかになってきた人と人を結びつけ、集団の中で「共有体験」を得やすいような環境を創出することができるプログラムの開発が必要なのである。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,800,000	0	1,800,000
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
総計	3,500,000	510,000	4,010,000

研究分野：生活科学一般

科研費の分科・細目：1501B

キーワード：世代間交流／幼老統合ケア／ドラムサークル／音楽療法／人材育成

## 1. 研究開始当初の背景

本研究に至る背景には、高齢者施設における音楽療法および学校教育における教育活動、そして保育園における音楽あそびという、福祉現場と教育現場の双方に立った実践経験が大きく影響している。ある認知症高齢者の音楽療法の時間に保育園児が参加したこ

とによって、高齢者側において明らかに精神的・社会的な面に良好な変化が現れ、園児側にも高齢者を理解しようとする姿勢が見られた<sup>1)</sup>。

この結果を受けて、高齢者と幼児や児童という世代間の形態に興味を持った。その上で「世代間交流を行っている」という高齢者施

設・保育園・小学校・中学校を調査したところ、交流は行っているが、年数回程度との答えが多く、様々な問題を抱えているということが分かった<sup>2)</sup>。その一つが、福祉現場と教育現場の壁の存在、交流を行う上でのコーディネート不在、そして何より交流プログラム作成のための時間的・人的余裕がないということであった。

世代間交流は教育現場や福祉現場にとって望ましいことであるとされているが<sup>3)</sup>、現実的には合築施設や空き教室転用を行っている「環境的には望ましい」状態の現場でさえも、交流内容についてはプログラム作成のための方策や資料がないという問題を抱えている状態であった。この問題に対し、解決策の一つとして、音楽を中心においたプログラムの展開が有効であると考えた。音楽のもつ「社会的機能」「集団力動」「非言語的機能」<sup>4) 5)</sup>は、世代の違う人々を結びつけるだけにとどまらず、身体的・心理的に障害がある人でも参加することが容易であると考えたからである。

#### 参考文献

- 1) 2) あそびがもたらした世代間交流, 吉津晶子, 『イキイキ音楽療法のしごと場』, あおぞら音楽社, pp. 42-44, 2003
- 3) 平成 15 年度版厚生労働白書, 厚生労働省/監修, ぎょうせい, 2003
- 4) MUSIC THERAPY and its Relationship to CURRENT TREATMENT THEORIES, E.Ruud, 1978, Norsk Musikforlag A/S
- 5) 子ども心理学入門 (共著), 吉津晶子, 北樹出版, 2004

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、第一に現在行われている保育園や小学校と高齢者施設における世代間交流プログラムについての調査を行い、音

楽がどのように使用されているかを調査し、問題点および改善点を明らかにし、より世代間交流を促進するような音楽活動プログラムの提唱および作成を行うことである。また世代間交流では地域文化的な教育観や社会観、倫理観などの枠組みも無視することができない。研究テーマを進める上で、これら多様な枠組みを有機的に関連づけ、高齢者、幼児・児童・生徒、地域社会にとって、より良い関係を築き上げていくための手段として音楽がどのような役割を果たすことができるのかということを中心に研究を進めた。

第二に、世代間交流に適した音楽活動プログラム試案の作成・実践を行い、分析することで、教育現場や福祉現場へのフィードバックを行い、多様な現場において活用できる交流プログラムの研究および開発のための試案を行った。

## 3. 研究の方法

- ① 実地調査と先行研究を通した世代間交流の事例検討
- ② 幼老統合施設における世代間交流プログラム調査 (アンケート調査)
- ③ 世代間交流プログラムの実施 (ドラムサークルを中心に)
- ④ コミュニティにおける交流活動アンケート (ドラムサークル実践者を対象に)

## 4. 研究成果

(1) 「世代間交流と幼老統合ケア」は、今後より一層、福祉の中において重要視されてくることが考えられる。これまで子育てに関わる福祉と高齢者福祉という縦割りの中で行われてきた福祉の枠組みが少子高齢という社会情勢の中で変化していく可能性が高いからである。この中で、子育てや親育て、子どもを取り巻く環境を一体として考えて

いくことがより必要とされてくるであろう。また保育者にとって、子どもの育ちを支えると共に、子どもを取り巻く環境調整力が今後必要とされてくる。特に、地域に開かれた保育所という中で、保育内容の充実とコーディネーターとしての企画力、そしてファシリテーターとしての実践力が必要である。すなわち子どもの発達に 関する視点、地域の人々(成年, 高齢者等)を理解するための生涯発達の視点、多世代の人々を結びつけていく社会的な視点を柱に、実際の保育現場において応用のきく保育者の養成のためのプログラムづくりが必要である。このことは、高齢者側の人材育成のためのプログラムづくりにも同じことがいえる。

(2) 「世代間交流を支える諸理論」について、世代間交流をどのように考え、どのように実行し、どのように評価するのかといったことに関わる諸理論について整理を行った。世代間交流は多岐にわたる領域に接し、その対象となる年齢層も幅広く、研究の切り口も多様であることから、様々な理論が援用されている。ナスbaum (Nussbaum J.) らの分類した諸理論を生涯発達心理学と社会心理学という二つの視座から捉え直すとともに、世代間交流において援用する場合の留意点について示した。

(3) 「世代間交流の事例研究」では、幼老統合施設において行われていた世代間交流プログラムにおいて、子どもと高齢者双方の福祉的利益の確保に留まらず、プログラムの延長線上に「地域福祉の拠点」としての目的が見えてきたことである。子どもと高齢者のみの交流に終始することなく、地域との関わりといった広角的な視野の中に、今後の世代間交流プログラム発展のための可能性が見

いだせるのである。

また、奈良市の実践においては、文化継承という目的に対して、「あそび」や「わらべうた」「地域文化理解」といった具体的な到達目標が配置され、その関連する活動を通して集団がまとまり、その結果、世代間交流が展開されているということは、今後の世代間交流プログラムづくりのあり方に大きな示唆を与える活動実践であると思われる。

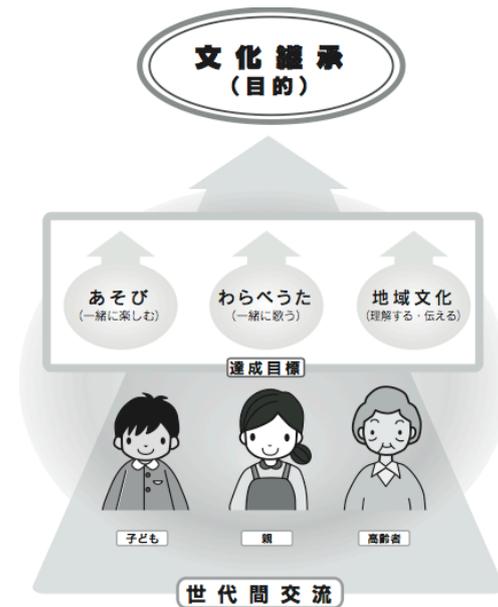


図1 奈良市音声館型世代間交流

イベント型のプログラムに関しては、地域住民の協力によって作られていくお祭りや、家族間のイベント的なものも含めると、個人レベル、家族レベル、そしてコミュニティレベルといった世代間交流の機会が、様々な場所で開催されているといえるだろう。今後、これらのイベント実行目的の中に「世代間交流」という考え方を明確な形で組み入れていくことができれば、幅広い世代と幅広い関係機関が、世代間交流における新たな方向性と流れを作っていく可能性があるのではないだろうか。そのためには、さまざまな世代間交流プログラムの内容提示と、関係機関における周知、および理解を得るための根拠

を示すことが必要となってくる。世代間交流を研究する上で、これまで研究されてきた、ある世代とある世代の間みのプログラムだけではなく、幅広い世代間を対象とした交流プログラムの開発・検討が必要であろう。

(4) 「世代間交流プログラムのアンケート調査」を通しては、世代間交流の捉え方として、子どもから高齢者へ、または高齢者から子どもへといった一方性の働きかけは、交流初期の頃において見られやすく、また必要であると考えられるが、交流を深めていくためには双方向性の働きかけと反応が必要となってくる。このような相互作用を生み出すような交流プログラムにはどのようなものがあるであろうか。アンケートの中において、交流プログラムの中に音楽を用いた場合についての回答を求めているが、その中では「一緒に楽しめる」、「心が和み交流が深まる」、「共通の音楽で世代間の接点をつくる」というような肯定的な意見が見られた。このことから世代間交流における音楽プログラムの有効性は高いと考えられる。

(5) 「世代間交流プログラムの実施」を通して、音楽そのものがコミュニケーションツールとして機能し、人と人を結びつけ、集団の中で「共有体験」を得やすいような環境を創出することが可能であるということを証明できた。



ドラムサークルの実践と世代間交流

この「共有体験」は音楽プログラムのみに限らず、他のプログラムにおいても可能ではあるが、音楽の機能がもつ可能性は大きいといえるであろう。参加する個人個人の中にお互いを尊重し合う態勢ができ、発信することと受容することを自然に行えるようになって、世代間交流プログラムにおける一つの到達点に達するのではないだろうか。

音楽プログラム（ドラムサークル）の中では、誰かが何かを「教える」、そして「教えられる」といった関係は存在せず、誰かが発した音を受け止めて「共有」し、その「共有」の輪が幾重にも広がっていくといった音による交流の中で、自分を「受け止めて」もらうという体験が同時に進行していく。すでにそこには世代間の違いは存在せず、多世代の人々が一体となる瞬間の体現が可能であった。このような人と人との相互作用と受容の関係は、今後の世代間交流プログラムのあり方や考え方において、大きな示唆を与えるものであると考える。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 2 件）

- ① 吉津晶子, 「幼老統合ケアにおける世代間交流プログラムの開発」, 平成 18 年度～平成 20 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) 研究成果報告書, 2009 (査読無)
- ② 吉津晶子, “親子支援における音楽療法の可能性 ～ドラムサークルという試みを通して～”, 子ども家庭福祉学科開設記念オープンカレッジ講義集録「子どもと家庭の幸せを考える」, 2007, pp. 14-18 (査読無)

〔学会発表〕（計 2 件）

- ① 吉津晶子, 認知症高齢者と福祉系学生間における音楽活動を通じた互恵性と可能性～

ドラムサークルのもたらす関係性から学生は何を学んだかへ、日本福祉文化学会第18回全国大会、平成19年11月18日、北翔大学

- ② Masako YOSHIZU, “Music Activities and Intergenerational Engagement: Hand Game”, Uniting the Generations: Japan Conference to Promote Intergenerational Programs and Practices (世代間交流国際フォーラム, 2006), 平成18年8月3日, 早稲田大学

[図書] (計 3 件)

- ① 草野篤子, 金田利子, 吉津晶子ほか, 三学出版, 『世代間交流効果-人間発達と共生社会づくりの視点から』, 2009, 全 256 頁
- ② 吉津晶子, 成美堂出版, 『保育園・幼稚園のうた遊び』, 2009, 全 159 頁
- ③ 吉津晶子, 晃洋書房, 「幼老統合ケアの理論と実践」, 『子ども家庭福祉のフロンティア』, 2008, pp. 92-99

[その他]

- ① 熊本ドラムサークル

<http://d.hatena.ne.jp/kumamoto-dc/>

- ② Uniting the Generations: Japan Conference to Promote Intergenerational Programs and Practices (世代間交流国際フォーラム, 2006) 報告書

<http://intergenerational.cas.psu.edu/2006/program.pdf>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

吉津 晶子 (YOSHIZU MASAKO)

熊本学園大学・社会福祉学部・准教授

研究者番号 : 60350568

### (2) 研究分担者

草野 篤子 (KUSANO ATSUKO)

白梅学園短期大学・福祉援助学科・教授

研究者番号 : 00180034

金田 利子 (KANEDA TOSHIKO)

白梅学園大学・子ども学部・教授

研究者番号 : 60086006

### (3) 研究協力者

長坂 希望 (NAGASAKA NOZOMI)

東京立正短期大学, 甲陽音楽学院・講師

小川 忠伸 (OGAWA TADANOBU)

熊本ドラムサークル (KDC)・事務局

森 恭三 (MORI KYOZO)

デジタル工房森組・チャートデザイン